# 地域イメージの形成と他者認識

日本史学専修　新川登亀男

**総合司会**

**趣旨説明**

日本史学専修　鶴見太郎

他者認識を指標にして〝地域〟を捉えようとする時、それは絶えず眺める側にもともと胚胎された問題意識に引き付けて行われることが多い。その結果得られる「地域像」とは、これまで多くの学者・作家・思想家の想像力を喚起するとともに、それぞれに根ざす問題意識の多様性によって、当該の人物が同時代に背負った課題から生じたその地域に対して込める期待とともに、過剰な意味を付与されることとなった。

そして柳田国男もまた、その例外ではなかった。一九三〇年代に入って、柳田は自身の民俗学の基盤が定まるにつれ、それまで各地で分散して進められていた郷土研究の統合を模索しはじめる。実際にこの試みは、大正末に柳田自らが主宰した『民族』において郷土史家との通信欄を設けたように、小規模な形でなされていたが、その成果をみないまま、同誌の終刊とともに次第に下降線をたどっていく。

一九三五年六月、『菱華』（三菱合資会社の社内雑誌）に発表された「フィンランドの学問」は、当時、柳田が直面していた日本民俗学の組織化という課題にフィンランドが先行して見事な事例を作っている点を強調した文章である。ここで柳田は特にフィン語が歴史的に背負った困難を中心に取り上げている。そして特にスウェーデン、次いでロシア領として独立を妨げられている間も、民間がフィン語の言語習俗を絶やすことなく維持し、一九一八年に独立が達成されるや、国を挙げて辞典の編纂事業に着手した事跡を高く評価している。

とりわけ柳田は、この編纂事業に先駆けて一八三一年に成立した「芬蘭文学協会」の活動に注目し、この団体による地道な努力が組織的に古老から前代の口碑を聞き取る作業の素地を作ったとした。この背景に柳田は民間から外交官に到るまで自国文化の探究心が根付いていること、それが新興国家としての意気とともに軌道に乗りつつあることを指摘し、惜しみない賛辞を送っている。

この一文が発表されたのは、ちょうど時期的に言って、「ツラン主義」が論壇の一部で盛んになった頃に重なっている。日本からフィンランドに到る広範な地域を射程におさめ、そこに一連の文化的な類似性を説くこの思潮に対して、柳田もまた慎重ながらそこに一定の可能性を模索していたことを窺わせる。もともと世界規模での比較民俗学の構築を生涯の目標としていた柳田にとって、遠隔地同士

似かよった習俗が何故伝わっているのか、という問題は重大な懸案事項だった。戦中戦後、柳田が傘下の郷土史家に対し、採集事例の蓄積とそれらに対する主観を交えない検証を説き続けたことは言うまでもない。しかしそれとは別個に、大きな見取り図によって各地の民俗を眼下におさめ、比較を行う視野を確保することは柳田にとって絶えず意識されていた。しかも、日本と比較対照されるべき一方の場所において自国の言語・習俗に対し見習うべき理想的な研究環境が整っていることは、なおさら柳田の高揚をうながしたに違いない。

この逸話に見る通り、〝地域〟というものを射程に置く時、そこには見る側の閲歴から生れる強い問題意識があり、そこから浮かび上がってくる〝他者像〟もまた、自ずから読み取る側の文脈に沿ったものとなる。そして自身の民俗学を確立するにあたって、つとめて「虚心に」対象を見据えることを説いた柳田もまた、この傾向から自由でなかったことは、地域を通した在りのままの他者認識とは果たして可能なのか、という問を我々に突きつける。

戦時下ナショナリズムという枠組が外された戦後日本の地域研究は、一見、虚心に他者像を見る素地を与えられたかのような印象を与える。しかし占領下を基点とするアメリカの圧倒的な影響力が我々にとって恰も空気のように、意識されないまでに浸透している事実が見落とされていないだろうか。



## 報告

# 農業繁栄国デンマークのイメージと日本での受容

西洋史学専修　村井誠人

本報告者は、現在、愛知県安城市、かつての碧海郡が、（決して「日本のデンマーク」という格助詞の「の」付きではない）「日本デンマーク」と自称している特異な現象を扱った。

一九三〇年にある新聞記者は「事程左様に、全国的に有名であり、今日日本デンマークとしての碧海郡を知らぬ者は親の名を知らぬより以上に恥しい事であるとまで云はれるやうになつた。」と記し、実際、農業の模範の地「日本デンマーク」を見ようと、一九三三年ごろは年間二万人近い参観者がこの地を訪れていた。一方、近年の現象でいえば、この地に因んだ三河安城駅の駅弁「Oh！デンマーク」が存在――中身は〝現実の〟デンマークを想起させない――し、その駅舎は「デンマーク農業」の意匠であるとうたわれ、また、一九九七年に開園した安城産業文化公園の名称「デンパーク」がある。最後のものは、公募に対し「小学生が応募して命名」したと言われるが、その名称が採用される際、「デンマーク」の名が意識されていたことは否めないであろう。

しかし、安城市がデンマークのコリング市と「姉妹都市」となったのは、愛知万博（二〇〇五年）の準備に入った一九九七年であり、